TDA News Letter　Vol.26

景/観/文/化

NPO法人 景観デザイン支援機構　けいかん・きこう　　http://www.tda-j.or.jp

2014-09-01

特集　湘南 C-X（シークロス）を考える

大規模まちづくりプロジェクト、湘南 C-X の景観をみる

我が国の産業構造の転換は言われて久しいが、今なお続いている。しかも最近は、企業にとって最後まで大事に取っておいたと思われるような立地の良い場所、鉄道駅の駅前の工場跡地等での、商業・業務開発が注目を浴びるようになったことも特徴である。川崎駅西口、中野駅北口などに見られるように、もともと都市基盤が未整備であったところに、駅前広場や街路の新設、容積等の規制緩和等によって土地の付加価値を格段に高めて全く新しい街の顔をつくるプロジェクトでもある。

いわば近年に於ける経済的成長戦略に沿うプロジェクトとも言えるが、これらの中には、ややもすれば立地性の良さから、大規模商業店舗に偏り、周辺や後背地域への配慮やバランスを欠くプロジェクトも散見できるのが現実である。しかしながら、今回特集として取り上げる湘南 C-X（シークロス）は広域的な拠点としての総合的な都市づくりが全うに実施された希有なプロジェクト事例と言えよう。JR 辻堂駅北口に広がる約 20ha の土地に、都市としての多様な機能をどう計画し、どのようなプロセスで実現させたのか、大規模都市開発に伴う市民、地権者、行政などの関係者の利害の調整・協議はどう行われたのか興味深い。

景観デザインは街づくりと同様に様々な分野、要素のコラボレーションで形成される。加えて大規模まちづくりでは、駅舎、駅前広場、幹線道路などの公共空間、建築、ランドスケープ、サイン・照明、色彩計画などの個々のデザインと全体の調和も求められる。今回 TDA でまち歩きを行った湘南 C-X を舞台として、景観デザインの実際について、計画段階から事業化、完成まで関係者間の調整・協議プロセスと、それらを通して理想としたものと実際に達成できたものを学び、検証しながら、その課題を考えたい。

TDA 正会員　高橋 徹

目次

□表　紙
「大規模まちづくりプロジェクト、湘南 C-X の景観をみる」
／（文）高橋 徹
／（写真）永山 哲也
□P 2～5
TDA NEWS
「都市再生のトータル・マネジメント」／長瀬 光市
「創造的デザイン協議」／菅 孝能
「住民の誇りとなる景色はつくれるか…湘南 C-X の試み」／吉田 愼悟
「湘南 C-X 計画」／戸田 芳樹
「C-X の住宅街区」／柳沢 厚
「広告景観の実現を」／宮沢 功
「湘南 C-X」／曽根 幸一
「トータル・デザインの重要性」／栗原 裕
「湘南 C-X を歩いて」／井上 洋司
□P 4～5
ランドスケープ事情
「湘南 C-X 住宅街区　地産地消のランドスケープ」／平賀 達也
□裏表紙
景観文化Q＆A
「街とアート」その 3　／工藤 安代
□裏表紙
景観ビジネス最前線
／㈱住軽日軽エンジニアリング
□裏表紙
ホワイトボード

TDA NEWS

「都市再生のトータル・マネジメント」
まちづくりの仕掛けと仕組み

「創造的デザイン協議」
街の価値を高める公共空間

今号は、本年5月10日に実施した2014TDAまち歩き「湘南C-X」（前回25号で緊急報告）についての特集です。プロジェクトのキーパーソンである長瀬光市氏、菅孝能氏に加えて、関係者の調整・協議の場で専門委員を務められた方々から寄稿を頂きました。また、まち歩きに参加された方々から、それぞれの専門分野の立場から感想を頂き、出来るだけ多角的視点で湘南C-Xの景観デザインについて語って頂くという貴重な機会とまりました。改めて、関係者皆様に御礼申し上げます。

1 「都市再生のトータル・マネジメント」
まちづくりの仕掛けと仕組み

長瀬 光市
慶應義塾大学大学院特任教授
／元藤沢市経営企画部長

工場跡地や市街地などの都市再生は、都市計画法などの規制誘導、直接供給、開発権授受の３つの手段を活用して、行政と地権者、ディロッパーとの関係性の中で進められてきた。規制緩和による民間活力の導入が叫ばれるようになり、規制緩和と開発権授受を通じて、民間の市場自体の発達を前提に民間セクターが主体となり都市再生が進められてきた。拡大都市の時代から成熟都市への移行期にある中、地方都市の湘南 C-X の再生にあたり、地域社会固有の課題を解決し、地域資源に裏打ちされた地域価値を高めるために選んだ道は、行政･企業･市民のパートナーシップによる都市再生であった。そのための都市再生のトータル・マネジメントを藤沢市が引き受けたのだ。

トータル・マネジメントとは、行政・市民･地権者が共有した「都市再生ビジョン」を実現するために、目指す地域の姿を導く「計画の総合化」、地域価値を増幅させ、事業経営を担う「経営の総合化」、様々な事業を束ねる「事業システムの総合化」である。マネジメントを具体化するために、図に示すパートナーシップの連携体制を構築した。そのコーディネート役に民間プランナー、学識経験者、企業者などが担い、専門力と調整力を駆使し、相互が連携することで知恵と工夫を創出して相乗効果を発揮し、都市再生を推進するエンジン役を担った。

トータル・マネジメントとは響きは良いが、利害、既得権、利益配分、組織、法制度、社会的便益、時間軸、空間デザインのあり方など、立ちはだかる壁がある。その壁を取り払う方策の一つとして全ての関係者や主体がハッピーになれる将来ビジョンの「見える化」と「全体最適」の追及が必要となる。計画の総合化では、多様な機能の集積を前提とした土地利用計画と市場規模を勘案した企業誘致との整合、規制緩和と土地利用計画を連動させる二段階都市計画手続き、地域の価値を高めるまち空間の誘導の仕組みと運用で苦心した。

経営の総合化では、計画を実現するためには開発事業の資金計画・事業採算性・事業主体や進出予定者事業が決まらないと、計画は絵に描いた餅となり、事業そのものが頓挫する危険性がある。調整は難航し、それぞれの利害や思惑が交錯し、可能性を追求するとともにリスクを如何に回避するかの調整であった。

事業システムの総合化では、湘南 C-X の事業スキームは、UR 都市再生機構と JR 東日本が事業主体となり、藤沢市が事業全体のコーディネート役割を担った。課題は、

3 「住民の誇りとなる景色はつくれるか…湘南 C-X の試み」

吉田 愼悟
色彩計画家／武蔵野美術大学教授
／ TDA 理事

景観法の施行以降、建築外装の色彩を数値で規定する自治体は増えた。数値による色彩基準は建築外装色として使用できる色彩を明確に仕分けすることができる。しかしこの数値による基準は基本的にネガティブチェックであり、景観上問題になりやすい色彩を排除することには長けているが、より質が高い景観形成を成し遂げようとする時には、数値基準だけでは不十分で、専門的な判断ができる専門家が必要となる。藤沢市では景観条例施行の当初から数値による色彩誘導とアドバイザー制度を併用し、質の高い景観形成を目指してきた。

私は 1990 年に藤沢市の景観審議会委員に任命されたが、それ以来お付き合いがある藤沢市の長瀬さん、そして都市デザイナーの菅さんと今回また辻堂で一緒に仕事ができたことは、とても幸せなことだったと思う。湘南 C-X の土地利用・景観部会のデザイン協議・調整の手法は、これまで藤沢市が推進してきた景観行政手法の集大成である。私は 1987 年に景観形成地区の指定のために行った江ノ島の環境色彩調査を通じて、景色はその地域にとってかけがえのないものであり、住民の誇りであることを強く感じた。湘南 C-X は新しい街で、歴史がある江ノ島ほどには早く景観形成の成果は見えないかもしれない。「住民の誇りとなるような景色はつくれるのか。」1960 年代から模索してきた都市デザイナー達の想いを込めたこの街の成長を見守りたい。

全体に落着いた低彩度のグリーンでまとめた道路空間

統一感のある３事業者が建設した集合住宅群

スピード感と輻輳する事業の調整、事業費の圧縮、補助金の確保であった。企業誘致が工事着工時に大半が決まり、基盤整備は着手から 3 年間で完成し、工場撤退表明から 9 年で湘南 C-X がグランドオープンした。まさに、試行錯誤による創意と工夫の連続であった。

2 「創造的デザイン協議」
街の価値を高める公共空間

菅 孝能
山手総合計画研究所 代表

湘南 C-X で重視したのは、屋外空間や建物内の共用空間など公共空間で人々が気持ち良く過ごせ、お互いに出会い触れ合う多様な社会的活動が自然に広がっていく活気と賑わいに満ちた都市空間を実現する事であった。歩行者動線や滞留空間の設えによる居心地の良い公共空間を創るには、個々の建築デザインにおける周辺環境への配慮が何より大切で、建物壁面の位置、高さ、開口部、色彩、緑化、人や車の出入口など建築物や公共施設が創り出す公共空間の量と質、それらの相互の関係のデザインが重要である。街並の中でお互いに良好な応答関係のもと、個々の建物が個性を発揮してこそ、街のブランド力は増す。個々の敷地が周りの環境と関係するさまざまな文脈を事業者・設計者に示し、単体としての建築だけでなく集団としての建築という視点から、その敷地ならではの計画設計を行う創造性を刺激する必要がある。

土地区画整理事業や街路事業は街路・公園等の公共基盤と宅地の造成であり、宅地の土地利用や建築物等のデザインは事業の枠外で、まちのコンセプトやイメージを担保するには、デザイン協議の新しい仕掛けと都市計画手続きの仕組みが必要であった。

土地利用等を誘導する「辻堂周辺地区まちづくり方針」、空間相互のデザインにより快適な都市空間を誘導する「湘南 C-X まちづくりガイドライン」の二つの指針により敷地と街路、敷地相互、建物相互の関係を創造していく手掛かりを提供し、「湘南 C-X まちづくり調整委員会／土地利用・景観部会」が、個々の計画の土地利用や景観形成に関する協議調整を行い、計画設計の創意工夫を促した。部会は都市計画、建築、造園、色彩、環境技術などの 6 人の専門家、藤沢市の担当 3 課長、区画整理事業施行者である都市再生機構で構成した。構想企画・基本設計段階からプロセスを追って実施設計まで、事業者と部会の意見交換をもとに事業者が修正案を提案して双方が納得のいくまで協議を繰り返し、少ないもので 4、5 回、多いものでは 20 回を超える協議を重ねてデザインを調整してきた。

図面や透視図だけでなく模型を使って、街並みデザインを議論し、周辺との関係を先ず事業者と部会で確認し共有しながら、各敷地のサイトプラン、建築計画、デザインを調整した。壁面後退による歩道状空地は歩道と同材の舗装材を使用し、隣地境界部には塀などの障害物を設置しないように要請し、通りに沿った植栽の樹種や擁壁のデザインは隣接敷地同士で直接調整する事も促し、歩道と一体性のある歩行者空間の創出を図った。こうしてデザイン協議の場が事業者・設計者と部会が対立あるいは上意下達の関係ではなく、お互いに知恵を出し合い、デザインを高め合う場になった。協議がまとまると、その内容は、地区計画にすぐ反映され、都市計画の変更手続きと建築確認申請手続きに入るワンストップ型の仕組みとした。

隣接するビル同士の地上部の軒高やファサードの調整が行なわれた

街に開いた路面店の賑わいを取り入れたテラスモール湘南

4 「湘南 C-X 計画」
高品質のランドスケープデザイン

戸田 芳樹
戸田芳樹風景計画 代表

湘南 C-X の作業から心に残った事を述べてみたい。現地の第一印象は背後にある斜面緑地の存在感であった。コンセプト「みどりの大観」は海岸林から斜面林を結ぶ計画地として、海風と共にまちを語るべきだと思った。しかし設計時に気付いたのは街路樹が小さく間隔が広い事であった。何でも補助事業の指針に基づいた結果という説明だ。そして完成して 3 年、街路樹は頑張っているが状況は芳しくない。日差しは強く、舗装の反射熱も高く、風が強い状況下で人間ならば幼稚園児程度のケヤキが成育するのは困難だ。そのうち大きくなるだろうでは「みどりの大観」は絵に描いた餅で終わってしまう。委員の一人として私は設計時にもっと強く主張すべきだったのだ。

次は成功した事例である。住宅ブロックは 3 事業者で計画を進めたが、ひとつがランドスケープを先行して提案した。提案は外構のレベルを超えて、C-X 計画全体を視野に入れ、地元の植木生産者との連携も含めた計画であった。委員会は提案者平賀達也氏を評価し、他のブロックも氏の参加を提案して実現させた。その結果、東西の緑地空間と敷地を横断する緑道を一体的に計画でき、西側は周辺住宅と馴染み子ども達が生き生きと遊ぶ空間が生まれた。

法律の運用や事業の内情、組織の都合を乗り越え理念に添った計画を進め、資産としての風景や、多様な人々の活動を引き出せる空間を作るべきだと改めて思った。

北口大通り線　ケヤキの街路樹

住宅ブロック西側の歩道

TDA NEWS

まち歩きでのコメント

分野の違う専門家 20 数名の参加で行われた「まち歩き」で、参加者の中からの有志に、率直なコメントを頂きました。

【土地利用・基盤施設概要】

① JR 辻堂駅　②北口交通広場　③辻堂駅北口大通り線　④テラスモール湘南　⑤神台公園　⑥産業関連機能ゾーン　⑦湘南藤沢徳洲会病院　⑧集合住宅ゾーン　⑨西口広場　⑩南口交通広場

5 「C-X の住宅街区」

柳沢 厚

C ーまち計画室 代表
／日本都市計画家協会理事

C-X にはさまざまな計画上・設計上の工夫が施されているが、住宅街区のそれが面白い。「複数のデベロッパーによる開発」の制約を乗り越えるさまざまなチャレンジをしており、ほぼそれらが成功しているように思う。住棟の高さや配置、オープンスペース計画、外壁・開口部の形状・色彩などを綿密に調整し、違和感のない住宅街区が形成されている。幕張パティオスのような強い主張や統一感はないが、居心地の良い環境になっている。

特に、隣接の既存住宅地との接点部分の処理に細かい神経が行き届いている点に好感が持てる。境界となる道路にそって潤沢な緑を配しているのは当然として、その緑の帯をくぐるように数カ所のアクセス小路と交流スペース（写真）がつくられ、住宅街区と既存住宅地とをつなぐ装置なっている。街区へのメインアクセスは商業施設側なので、既存住宅地側はいわば「裏」に当たるが、その裏に楽しげな小路等を配したのは、細やかな心遣いというべきである。

6 「広告景観の実現を」

宮沢 功

YP DESIGN 代表
／ TDA 代表理事

専門家のコラボレーションによる計画と聞いて期待して参加した。最近、行政の景観に対する屋外広告物活用の方向も見られ、大型商業施設を含んだ湘南 C-X に期待した。デッキからのアプローチや、空間構成、外構の植栽、太陽光パネルによる歩道照明などは良く考えられている。しかし、屋外広告物に対する取り組みは残念ながら期待はずれであった。藤沢市の屋外広告物条例の関係もあると思うが、商業コンプレックスの楽しさ、賑わいが感じられない。全体景観としての空間はよく表現されているが、反面、店舗沿いの賑わい、楽しさの演出がもう一歩という感じある。その原因は看板が基本的にガラスの内側に設置されている事で、店舗の表情が表に出ていないのである。結果、窓面広告（外部から見えても屋外広告物規制の対象にならない）を多く出現させかえってマイナスの状況をつくっている。屋外広告物をまちの景観形成要素として活用する視点がもっと必要である。

ランドスケープ事情

「湘南 C-X 住宅街区　地産地消のランドスケープ」

南北方向の環境軸として整備された 300 mに渡る緑道。地域の素材だけで作られている。

地球半径の 1/10,000 の窪みを持つ貫通通路。月や星の運行法則が壁や床に刻まれている。

湘南 C-X の位置する藤沢市エリアは、海岸沿いにまちを守る防砂林があり、丘陵地沿いに神社仏閣の鎮座する斜面林がある。海辺での行楽や里山での祭事など、日々の暮しの中で親しまれてきた緑が地域間における東西方向のつながりを構成しているが、南北方向のつながりは日本の動脈ともいえる鉄道や国道に分断されてきた。特に JR 東海道本線沿いには、日本の近代化の一役を担った工場群が長らく街の中心部を占拠していた歴史があり、工場跡地を駅前再開発事業として再整備する本計画にあっては、南北間における地域のつながりを強固にする新たな住環境の創出が不可欠であった。

ランドスケープのデザインは、辻堂駅からつながる南北方向に長い敷地形状を新しいまちの環境軸として価値化するため、海からの光や風を中庭の緑で住宅に取り込みながら、それぞれの住宅地がまち全体の緑としてつながり、将来的には海岸域と里山域の環境をネットワーク化することを目指した。私たちが考える新しいまちの環境軸とは、この地の歴史ある景観資源と自然環境を、この地の由緒ある人材資源と建設資材によって継承する次世代に誇れる空間のことである。この地産地消ともいえるランドスケープの試みは、新しいまちと周辺地域とのつながりの関係性を模索する行為そのものであった。設計段階では、藤沢市が主催する景観部会において新しいまちづくりにおける設計の作法を問い、地域の中に新しく創出されるべき環境と、地域が大切に守りつなげるべき風景との見極めを

7 「湘南 C-X」

曽根 幸一
環境設計研究室 主宰
／TDA 副代表理事

既存の街を更新するなら再開発で、その調整には 10 数年を超える例も少なくないが、この湘南 C-X は企業移転による大規模敷地の新開発である。住民の少ない駅前に新たな街の顔をつくるプロジェクトだから行政が主役になるのは当然だが、説明によれば UR、JR といった半官的な組織との連携がこのプロジェクトを成功させた鍵になったのではあるまいか？　とかく無表情で巨大な箱の中に別の街をつくろうとする商業施設を中心にすえているのだから調整の苦労は想像がつく。駅前広場とこれを囲むように構成した段状のファサードや小道具、沿道の小店舗などヒューマンなスケールの導入にも成功しているし、北側に延びる民間企業の前庭もいい。とりわけ西側に計画された住宅地の外構は見応えがある。とはいえ、駅の正面軸の沿道に高木の緑が少ないこと。裏側の公園に樹木がほとんど観られないこと。そして何よりも住居群の入口側になる巨大な駐車場の始末などには疑問もなくはない。

8 「トータル・デザインの重要性」

栗原 裕
ユー・プラネット 代表
／TDA 正会員

『湘南 C-X』は「都市再生のトータル・マネージメント」であると長瀬氏は語っているが、そればかりではなく、公共空間（外部空間）の「トータル・デザイン」にも配慮されており大変すばらしい。

全体のデザインコンセプトを受け、各道路のデザインをそれぞれ個性的に考え、また、それぞれの道路に接する沿道（民地内の外構）のデザインは道路との調整を図っている。これは菅氏を中心とした各デザイナー、各設計者、また、各事業者とのコラボの結晶であるといえる。

また、舗装、植栽、ベンチ、横断防止柵、植栽防護柵、照明等の個々のデザインにもかなり配慮されているとともに、それらの配置、納まり方などのディテールにも十分な配慮が感じられた。これらの調整だけではなく、電線共同溝の地上機、信号機、道路標識等、道路管理者のみではなく、インフラ企業、警察等との調整が必要であるにもかかわらず、短期間でこれらの調整を行ったことはすばらしい。

9 「湘南 C-X を歩いて」

井上 洋司
ランドスケープアーキテクト／
背景計画研究所 代表／TDA 正会員

印象的なのは駅前の交通広場である。乗用車専用のロータリーが備わっている事で、周辺住民の自家用車でのアクセス、研究機関等への来客のアクセスへの配慮が感じ取れる。

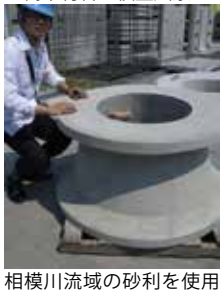
また集合住宅群と既存住宅地間の道路沿いは、統一された景観設計が施され、数社によるマンション開発を感じさせない佇まいで、歩きやすかった。

ただ、街路空間での詳細にいくつかの疑問を感じた。その典型がハニーサックルを樹種に選んでいる立体トレリスのガードレールだ。この樹種の性質を理解していなかったのかもしれないが、上部にばかり葉が多い茂り整形された厚みのある緑の壁が管理の問題もあり実現していない。さらに公園の緑が貧弱であったり、街路樹の緑に元気がなかったり、設計の詳細での少しの工夫が欲しかった。ただこれはいずれも改善できる事であり、今後の管理、監修に期待が持てるまち歩きであった。

平賀 達也　ランドスケープ・プラス 代表

藤沢市内の植木生産地での樹木材料の検査風景

住宅エントランスのシンボル樹として植樹



相模川流域の砂利を使用した PC 材料の検査風景

緑道沿いのテーブルやベンチとして利用

行った。また、施工段階においては、地元の植木生産者を訪ねて植栽材料について教えを乞い、この地域ならではの造園材料や造園技術を工事に取り込める状況をつくった。また、藤沢市エリアの生命圏である相模川流域には、都市基盤材として使用されるコンクリート二次製品の工場が多く存在するため、海外から石材や建材を調達する代わりに、地元の川砂利を使用した重厚感のある PC 製品を舗装材やストリートファニチャとして活用している。

外国産の建材や太陽光パネルをこれ見よがしに貼りつけた今時の景観づくりよりも、地域の環境や産業を活用した旧来の景観づくりから学ぶべきことは多い。自然への働きかけにより、地域における環境性能の成長を促すことは、都市的なスケールだけでなく、建物単体のプロジェクトにおいても十分に可能だ。大切なことは、それぞれの領域がつながりながら成長することで、そこに新しい価値が生まれることだ。快適な環境の連鎖は地域の新たな財産となって、人々の意識をさらに大きな領域へと広げていくことであろう。これまで慣れ親しんだ生き方を変えることは難しいかも知れないが、地球上の誰にも迷惑をかけることなく幸せに暮らしていきたいという気持ちを、ひとりひとりが持てるような仕組みづくりを社会に向けて発信していくことも、私たちが取り組むべき大切な仕事のひとつになっていくと考えている。

景観文化Q＆A　「街とアート」その３－社会問題と関わるアート－

NPO法人 アート＆ソサイエティ研究センター
代表　工藤 安代

Question：　アートと都市・地域の関係は、今どのような傾向にありますか？～その２～

Answer

2000 年代「景観型」アートの次は、「社会参加型」アートについてご紹介したいと思います。

‘90 年代に入ると、実社会とより深い関わりを求めるアーティストが現われはじめました。この活動にはいくつかの明らかな特色があります。1）アーティスト個人の作品ではなく、人びとを巻き込む参加型である点、2）多様な表現方法を用い、結果としての作品よりもそのプロセスに重きを置くプロジェクト型である点、3）参加者との対話やインタラクションを重視し、アーティストが全てを管理しないオープンエンド型である点、4）地域コミュニティの問題から都市計画、社会福祉、環境汚染、青少年犯罪など、現代社会が抱える様々な問題を活動テーマとしている点です。その表現は、社会問題を象徴的に指し示すタイプや、実際に問題解決を目指すアクティビズム的なタイプなど、多様な範囲に及んでいます。

一つ事例を紹介しましょう。あるアーティストが地元で起こしたプロジェクトです。引越してきたばかりのアーティストは、ご近所が挨拶も交わさない殺伐とした地域であることに気がつきます。写真家である彼女は、子どもたちに声をかけ、まずお隣さんをどのように撮影するか、インタビューするかを教えます。出来上がった写真を子どもたちと共にバナーに印刷して、撮影した人との会話からこれぞという言葉を選び書き込んでいきます。出来あがった作品は、地元の各所に展示され、ご近所の“つぶやき、秘密、夢”が伝わるものとなりました。

「アートを通して、子どもたちは自分たちには何か伝えることがあるのだということ、それを伝える方法を学びます。そして自分が望むことやそのための挑戦をはっきり理解できるのです。私たちはただその道すじをナビゲートするだけなんです。」とプロジェクト・ディレクターは語っています。アーティストが作品をすべて完成させるのではなく、参加者がいてこそ成り立つあり方。人びとがその過程に参加することで、何かが少しづつ変わっていくようなアートのあり方。そういった社会と向き合い、リアルな問題に深く関わり、それをアートという形にしていく活動が、現在、地球上の様々な地域で起こっているのです。

地域の住人の写真とコメントを街なかに展示したイベント。
ジュリー・キーフ作『こんにちはお隣さん（Hello Neighbor）』（2007-現在）

景観ビジネス最前線

アルミで考える
アルミでつくる

ＪＲ辻堂駅北口交通広場

アルミドームトラス
アルミポストレス高欄

http://www.sne.co.jp/

株式会社
住軽日軽エンジニアリング

〒136-0071 東京都江東区亀戸2-35-13 新永ビル TEL. 03-5628-8540

ホワイトボード　『景観アドバイザー・サミット』告知

景観法以来、景観にまつわる委員会、アドバイザー制度等が成立しつつあります。同時に、委員の専門家間や自治体担当者間で、景観の施策を巡って多様な議論と課題が浮かび上がってきました。そこで多くの専門家委員を擁するTDAとして、この問題を顕在化する為に、専門家・行政担当者の意見交換の場、**『景観アドバイザー・サミット』**を企画しました。2014年11月８日（土）台東区立浅草文化観光センターで開催いたします。皆様ぜひご参加ください。詳しくはTDAホームページをご覧ください。

TDA
TDA JAPAN

NPO法人 景観デザイン支援機構　事務局

〒 111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F
Tel：080-6722-4114　Fax：03-3847-3375　E-mail：main@tda-j.or.jp
http://www.tda-j.or.jp　［編集：㈱アーバンプランニングネットワーク］2014091000

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。
㈱昌平不動産総合研究所／㈱住軽日軽エンジニアリング／都市環境デザイン会議／㈱コトブキ／三井不動産㈱／㈱都市環境研究所／東京ガス用地開発㈱

頒価 ¥100